

令和5年度（2023年度）第2回熊本市生物多様性推進会議 議事録要旨

1 日 時 令和5年（2023年）10月 10日（火）14:00～15：30

2 場 所 熊本市本庁舎7階会議室

3 出席者 生物多様性推進会議委員(9名)

佐山 勝彦 委員	高宮 正之 委員
大住 和佑 委員	甲斐原 巖 委員
永野 陽子 委員	藤本 聡 委員
澤 克彦 委員	奥村 正美 委員
大澤 隆文 委員	

4 欠席者 生物多様性推進会議委員(3名)

石黒 義也 委員	藺畑 親志 委員
蓑田 公彦 委員	

5 次第

(1) 開会

- ・事務局挨拶
- ・定足数報告（12名中9名出席）
- ・配布資料の確認

(2) 議題

- ・次期「熊本市生物多様性戦略」施策等について

(3) その他

(4) 閉会

開 会

【事務局挨拶】

梶原 桂子 環境政策課長挨拶

議 題

【次期「熊本市生物多様性戦略」施策等について】

高宮委員長 議事次第の次期熊本市生物多様性戦略の施策等について、事務局から説明をお願いします。

梶原 環境政策課課長より、資料1を説明

磯田 環境政策課主幹より、資料1の戦略ごとの施策等を説明

高宮委員長 第1回推進会議では資料の4ページにある次期戦略の骨子案について、どうい
うことをやっていくのかということまで話が進んでいて、その戦略ごとに状態目標を立
て、それに対する行動目標、具体的な施策があって、成果指標ということで、それぞれの
5つの戦略についての報告であった。こういうものを足したほうが良いのではないかと、こ
こは変えたほうが良いのではないかとのご意見をいただきたい。

大住委員 9ページで、地下水と書いてあってとても素敵なのですが、実はいろんな課で
なさっている地下水についてのこと、水保全課がなさるのもあまり変わらないという気が
する。やはり生物多様性に特化した、地下水が豊富だからこうなのですよというふうに、
生物多様性をしっかりうたえるようなことを、ここに持ってきたほうが良いのではない
か。地下水と生物多様性の関係をしっかりうたったほうが良いのではないかと。

梶原 環境政策課課長 庁内でも、生物多様性の保全や、生物多様性自体がきちんと理解
が進んでないということもあり、いきなり地下水が出てくることに違和感があるという意
見もでていて。今日はお示しできていないが、素案の作成の時には、生物多様性の保全の
ひとつに、私たちのめぐまれた地下水があって、それがあって、農業とか、いろんな
取り組みにつながっているということ、できれば概要版の方で少しお示しをした上で、
だからこの戦略に地下水を持ってきているのだということ、市民の皆さんにも分かりやす
くなるような形でお示しできればと思っている。また引き続きご意見をいただければと思
う。

大住委員 指標種のモニタリングの実施というのがあるが、私たちは毎年小学生を中心
に、簡単な水質調査を実施している。簡単なのでよいが、高校生以上の人たちと一緒にし
っかり調査をした方が良いのではないかと、そういう道ができないかなと思っている。

高宮委員長 今回の発言は、6ページ、基本戦略1「知る」の状態目標1-1の中の行動目標1-2
のところである。その中の施策として指標種のモニタリングの実施ということがもう少し
精度をあげてやれたらどうだろうかという話だが、何かあるか。

梶原 環境政策課課長 高校生とのつながりは、とても大事に思っており、それはモニタ
リングだけには留まらないと思っている。今年も必由館高校のみなさんと取り組むプロジ
ェクトを市役所全体でやっている。特に環境局は今後将来を担う高校生と一緒に何かやっ
ていきたいという思いを強く持って、今年も実施してきており、来年もぜひやらせてもら
いたいと、学校と話を進めている。その際、ご意見いただいたモニタリングというのをご
提案させていただくので、またご意見いただければと思う。

奥村委員 9ページ、基本戦略4「創る」の行動目標の施策の中に、希少種に配慮した下草
刈りや移植という表記がある。下草刈りというのは一般的には、植林した樹木の下刈り作
業のことのような気がするのですが、単なる草刈りという表記にした方がよいのではないかと。

北村 環境政策課 市役所では立田山に生育するトダスゲやサワトラノオなどの希少種に
ついて、種子が落ちてから草刈りをするという事業をやっている。植物の成長に配慮した
草刈りということで下草刈りと記載をしている。

奥村委員 もう一点。10ページ、基本戦略5の「活かす」の行動目標の5-5の施策として、街路樹植栽スペースの雨水貯留機能の活用とある。熊本県樹木医会で、熊本市内の街路樹調査を実施したが、植栽スペースが非常に狭くて多くの場所で根の伸長肥大によって縁石の持ち上げや、根上がり等が見られ、通行者への危害防止対策が必要になっている。そのため現状の狭い植栽スペースのままでは雨水貯留機能はあまり期待できないものと思われる。まずは街路樹の健全な生育を促すための植栽基盤の整理が必要ではないか。

北村 環境政策課 こちらの事業は、みどり公園課という、今年から新しくできた部署が担当しており、まだ市内のどの場所に貯水機能を持たせた活用をするか具体的な場所は決まっていないと聞いている。ただどこかの場所では、実施したいと聞いているので、奥村委員がおっしゃられたように、植栽基盤の整備が重要という話も一緒に協議した上で、こちらの施策の方も考えていきたい。

梶原 環境政策課課長 今の街路樹植栽スペースのご意見は、事実を知っていらっしゃる委員ならではのご意見だと思う。これを入れているのは、状態目標として生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されているということと、今回新しく国の方でも状態目標に入れられており、私どもも何かめぐみが活用できないかというところで模索した結果、街路樹・植栽スペースの雨水貯留機能の活用というものを記載している。今お話を聞いて、当然順番としてまずは植栽・街路樹のほうを整備してからという形になるかもしれないが、担当課と検討を続けていきたい。

甲斐原委員 全体的なことでもう一度教えていただきたい。大住委員からも先ほど出た地下水の位置づけで、私は前回熊本市における豊かな水を含めて地下水ということで賛成した。今回それぞれ基本戦略1から5の中で、より具体的に設定され、理解しやすくなったと思うが、地下水が生物多様性の豊かさ等々の中で、どういうキーなのかというところは最初に出てくるべきだと思う。口頭で説明されているが、冒頭に地下水を持つてくるということが、豊かな生物多様性、これまでの取り組み、成果課題の中で、地下水が豊かさを表す、だからチャレンジしていくのだということと、別に出すのではなく、冒頭に出てくるべきだと、その方が分かりやすいと思う。前回からずっと考えて、ご説明された中で、より分かりやすくなったが、やはり引っかかるのはそこだなと思う。地下水を出すのであれば、生物多様性の豊かさの中のどこなのだ、だから地下水を示すのだ、というところをお願いできたらというのが一点である。

また、それぞれ基本戦略1から5まで、それぞれ最初に説明された施策を中心に庁内の各課で分担しながらやるのだという意気込みを具体的に出している、成果などを踏まえて出しているというのはよく分かるが、やはり私たち民間団体からすると、市役所と協働しながら、今後は企業やいろんな団体とさらにパートナーシップでやっていこうと思っている状況である。基本戦略2「学び・つながる」の状態目標の2-2の「活動団体等と連携して実施されている」、ここは「つながる」であるから庁内だけではない各活動団体という具体的なキーワード、皆で手を組んでやっていくのだというのが出てくる。しかし、他のところも当然、施策等のところを私は前回もこだわったが、庁内のことを中心で出されるのであれば「等」はいらない。「学び・つながる」も活動団体等と連携してというところでも具体的に出されればそれで理解しやすいかなと。結局この「等」が何なのかなと分からないところである。以上2点。

梶原 環境政策課課長 地下水については、この場で説明するような資料を準備しておくべきだったというのは、おっしゃる通りである。私たちも、この計画の本体とは別に、や

はり生物多様性というのをいかに分かりやすく、特に地下水、それに関連していろいろな取り組みをされている方がいるということ、どう紹介していこうかということは、別途内部でも検討しているが、なかなかまい絵や説明ができていない状況である。素案をお示しする時にはそういった分かりやすい絵などをお示ししたいと思う。その中でみなさんがどのようなことをされて、だからこうつながっているのだというのを、もう少し個別にお伺いしてご意見等をいただきながら並行して進めていければいいなと思っている。

この戦略というのは、最終的には本として出来上がるが、それを市民の皆さんにくまなく読んでいただくというのはなかなか難しいと思っている。ではどうやって市民の皆さんに、活動団体の皆さんや市民の方が取り組んでいることを広めていくのかというところが重要なポイントだと思っている。そこは引き続き工夫をしていきたい。今日はご準備できていなくて申し訳なく感じている。

それから施策等については、施策や成果指標など、そういったところも含めて「等」とつけている。こちらの記載には庁内の各課の取り組みのみであり、これまでもいろいろな皆様が取り組んでこられてきたものが出てきてないと感じている。そこも素案の時には現状と課題ということで、最初に戦略ができて、皆様が何をやられて、どういうことが課題で残っているのかということにも入れたいと思っている。委員の皆様にも活動団体の方もおられるし、他にもいきものネットの関係団体の皆さんなどたくさん熊本市の生物多様性の保全について取り組んでいる方がおられるので、その方々の取り組みの成果というものが出てくるようなものを別途考えていきたいと思っている。

永野委員 いろんな団体で取り組みがされているが、私は水前寺の江津湖の地域で活動している。地域の住民が一生懸命守っている、これが事実である。このため愛着も非常に持っているので、そういった地域住民との交流なども非常に大切ではないか。

地域住民の声をたくさんもらったので、砂取校区の自治協議会とプロジェクトチームで請願書を市議会に出した。野鳥の森の未永く清らかな水源地、緑豊かな生物多様性と景観を守り再生保全に活用していくということをお願いしたいという請願書を出したところ、全会一致で通った。地域住民との交流も、もう少し大事にしていきたい。

梶原 環境政策課課長 江津湖の件については、私どもも承知しているが、市としてどう対応していくかということになっている。少し論点がずれるかもしれないが、私ども環境局としても、当然江津湖地域を含め地下水について大事な場所ということは承知している。今年もこの秋から希少種の調査を環境政策課の方で実施したいと考えている。私たちが飲んでる地下水というのは、ただずっとあったわけではなく、当然地域の方がずっと守ってこられたからこそあるのだということ、単にめぐまれているというのではなくて、先人が守り継いできたものなのだとすることを、私たちが忘れないように、そこはきちんと伝えていきたい。

澤委員 まず2ページのところで、「市民一人ひとりが」というところが、もう少し熊本らしさという言葉遣いが出てくると、どこの都市でも使えるものではなくこの熊本だからこそその観点が大事なのではないか。

熊本市としての政策の重要性はあるが、生物多様性または地下水のことは、熊本市で境界線をぴたっと線を引けるものではないので、都市圏という発想、生きものと水のつながりは他の地域にも及んでいるという観点を持ってこの戦略がたっているという視点が重要になってくる。盛り込むとなると工夫が必要とは思いますが、それがないと、ここからここまででいいでしょうというふうな縦割りになってしまうので、そこは少し突破するようなもの見方は重要になっていく。

続いて、成果指標に関するところで、6ページ、7ページの基本戦略1と2「知る」「学び・つながる」は生物多様性の意識を言葉としても、成果指標にしても書いてあるが、途端に8ページの基本戦略3「守る」から少しゆらぎになってくる。例えば、「守る」というところの出口が、温室効果ガス削減となっている。都市圏での脱炭素の取り組みという意味は分かるが、ここはもう少し生物多様性に配慮した施策等の数というか、様々な部局が取り組んでいる施策がいかに生物多様性につながっているかという観点で、各課にまたがって一緒に取り組んでいる、その量的質的に動いているという姿をもって、市としての全庁的な取り組みの評価が「見える化」されると良いのではないか。

それと、9ページ、基本戦略4「創る」のところ。これはいろんな事業の中で、具体的に分かる数がおそらく外来魚という形で江津湖というポイントになっていると思うが、合併した後のこの広域の熊本都市圏として見たときに、北は植木の湧水のエリアであったり、南の雁回山や金峰山があったり、立田山はある意味片方は山の森林生態系が維持されているかに見えて、我々としては反対側の斜面の住宅化というところについては非常にじくじたる思いも半分持ちながらというところでは、例えば竹林の整備状況など、なにかこの指標そのものの多様性というか、観点の中での重点と置くべきところというのを、熊本の多様な自然環境のありようというのを指標の中にもなんらか取り込むことで、この戦略の持っている幅広さというものがうたえるのではないか。

最後は10ページ、基本戦略5「活かす」の指標で、熊本市の地域の魅力を活かしたイベントの実施回数という観光政策的にいろいろイベントをやりましたという数だけを拾いがちになってしまいそうなので、生きものとかそういうものの観点、そういった地域の魅力、資源を活かしたイベントという形のとらえ方ということで、ここを少しこの戦略らしさというものをを出していただけるとよい。花博に合わせて、今度は河内のほうの漁港から出るモニターツアーとかも組まれており、早速申し込みがあって結構うまっているようだが、ああいう手が打たれることによって、関心度とネットワークが広がると思う。そういったところのイベントの持ち方、そのものの方向性もしっかりこういった戦略を通してメッセージングしていくという、意図を発揮できるとよいのではないか。

梶原 環境政策課課長 2ページの2050年の望ましい姿のところだが、現戦略を最初に策定したときに、2050年自然と共生する社会と世界を目指すという中でこちらのキーワードを考えてずっと使ってきた。私どもとしては、国は2030年目標を、世界と同じでネイチャーポジティブの実現としているが、2030年目標がカタカナで分かりにくいという意見もあるので、熊本市らしい熊本市民がやっていくのだという、分かりやすいものになるよう考えている。

それから都市圏の発想については本当に重要で、今、温暖化対策に関する計画は都市圏として策定したが、本当は生物多様性も都市圏で策定してもいいものだと思っている。都市圏の発想をどういった視点で入れるかという課題はあるが、素案の作成の時には、そういった視点も入れるように検討していきたい。

それから指標についてだが、そこは私どもも一番悩ましいところで、成果指標ということなので、はっきりと何か数字で表せるもの、数値目標として出せるものがないのではないかというのが一つ。それから戦略ごとに、状態目標を持っているので、この状態が保たれたかわかるものでないといけないという観点から、庁内で事務局も含めて話した結果、こういった成果指標をおいている。今日は他にもご意見いただくとおっており、そこも含めて持ち帰り、次回は数値の設定まで入れたところで皆様にお示しする必要があるのであると思っている。おっしゃるように生物多様性ということから離れてしまった目標というのはどうなのかということだと思うので、そこは引き続き検討していきたい。

大澤委員 今の指標の話に関連して、まず8ページ、基本戦略3「守る」のところだが、この成果指標、先ほどご意見にあったように温室効果ガス削減だと生物多様性の戦略とし

ては、あってない感じがする。例えば「守る」という意味では、施策の緑地森林の保全とか、9ページ、基本戦略4「創る」のところの緑化支援とリンクするのが、一番典型的なのは緑化率とか保護区の割合とか、熊本県の戦略では、確か保安林の指定面積とかを指標にしていたが、そういった面的な広がりでも自然の豊かさを守っているかというのを指標にした方が自然な感じがした。そういうものであれば、ある程度データであるのではないかと思うし、保安林の面積が一番いいのかは分からないが、県の戦略や他の自治体の戦略とある程度共通比較できる指標を使うと、特に市がどれだけ取り組みが進んでいるかということをも可視化しやすいと思うので、せっかくであればそういう面的な生物多様性の保全状況が分かる指標を使ったらどうか。

それから同じ「守る」の地下水の施策で、地下水質の常時監視と硝酸性窒素対策とあるが、生物多様性というよりは純粋に水質の監視と水質のコントロールのように見える。ここに書くとしたら、むしろその次の基本戦略4の「創る」の中の重点プロジェクトの中で、少し触れられている水源かん養林の整備・保全を通じた地下水の保全というふうにした方が生物多様性を使っていかに地下水を保全しているかというのがつながりを含めて分かりやすく示せると思う。

それから9ページ、基本戦略4「創る」の重点プロジェクトのところで、例えば水田に水を張って、水源かん養するといったものであれば、人為的にある程度水を張って守るという意味で、地下水を育むということでもあり、水田なので生物多様性とも連携があるので、そこは残してもいいと思うが、2行目の上水道管の整備についてはあまり生物多様性というよりは、インフラの管理の話なので、ここに書くのはどうなのかという気がした。

この基本戦略4の「創る」の成果指標が、江津湖の外来魚の割合ということで、先ほどご指摘あったように、もう少し市全体で外来種対策がどれだけ進んだかというのを図る指標があれば、それを使えるかどうか検討されるのもよいかと思う。もう一つ、ここでお金の話を書いてあって、つながりの森補助金、ESG債の促進などがある。あるいはその前のページの基本戦略3の「守る」の施策の一番下の市電の緑のじゅうたんの維持管理もこれは確か寄付金制度とかあったと思うが、そういったいろんな生物多様性に資するお金を市全体としてどれだけ動員できたかというのを指標にすると、それも少し定量的でどれだけ進んだかというのを可視化しやすいので、もし可能であればお金の面の指標というのを基本戦略4「創る」、もしくは基本戦略3「守る」で考えてもいいのかなという気がする。

10ページ、基本戦略5「活かす」のところで、地下水の重点プロジェクトで魅力発信が2つ書かれているが、これは基本戦略2「学び・つながる」とか、基本戦略1「知る」であって、むしろ魅力発信とは普及啓発の一環である気がする。今回の資料4ページの、次期戦略骨子案の基本戦略5では、地下水の活用と書いてあるので、10ページの魅力発信は果たして地下水の活用といえるのかどうか、地下水の活用というよりは地下水に関する普及啓発なのではないのかなと思った。むしろ生物多様性を「活かす」という意味では、生物多様性を活かして、いかにすぐれた水質の十分な量の地下水を市民に提供できたかという方を前面に出した施策にしてもいいのかなという気がした。成果指標のところは、先ほどご指摘あったように少し生物多様性というよりは地域振興全体の指標になっており、また基本戦略2の「学び・つながる」の中で生物多様性について学ぶ環境学習というのもあり、それとの重複感が若干ある。基本戦略5の成果指標については、生物多様性を活用したイベントの数にするのか、あるいは重点プロジェクトで地下水にずっと触れてきているので、結局生物多様性を守ってどれだけ優れた水質の十分な量の地下水を市民に提供できたかというような地下水に関するデータを最後の成果指標にするということもあると思った。あるいは生物多様性をもう少し着目すると、湧き出た地下水の水質にどれだけ優れた在来生物が守られているかという、生物指標を使って地下水の供給状況を評価する、それを成果指標にするかというやり方もあると思うので、基本戦略5の成果指標についてはもう少し生物多様性に着目して、地下水も少し考慮して指標を検討されてもいいのかなと思う。

梶原 環境政策課課長 8ページと9ページの成果指標について、ご意見の通り緑化率とか緑地の面積とか創出量の検討は行ったものの、どういうふうに数えていくのか、どうやってそれを増やしていけるのかなど、そういうところを考えた時に、そういった指標の設定が難しかった。それから江津湖の外来魚も、やはり市内でもなぜ江津湖だけなのか、という話も当然出たが、例えば全体のアライグマがどれだけ減ったかとか、今何匹いるのかが分からないとか、結構細かいところがあり苦慮しているところである。ここは引き続きいろんな担当課と話をし、やはり生物多様性に資する、より相応しい指標を再度検討していきたいと思っている。

それから基本戦略3の重点プロジェクト「良質な地下水を保全」と、戦略4の重点プロジェクト「豊富な地下水を育む」のところで、かん養林は「守る」の方がよいのではないかというご指摘をいただいたので、そこは検討していきたい。

9ページの上水道管の整備というところは、少し不自然というお話だったかと思うが、私たちもできるだけ地下水の保全には水保全課だけでなく、他のいろんなところもやっているからこそ今地下水があるのだということではできるだけお示ししたいと思っている。ここで上水道管を入れているのは、汲み上げてみなさんに供給する中で上水道管が漏水してしまうとどんどん汲み上げなければいけないと、そういった中でこのような整備も大事な地下水保全の取り組みの一つだということをお示ししたかった。ただ、この場所でよいのかとか、この表記では伝わらないということだと思うので、そこは改めて検討していきたい。

それから10ページ、基本戦略5「活かす」では、現行の戦略でもいろんな地域のお祭りとか、例えば特産物とか文化とかそういったものも生物多様性のめぐみだということをきちんと理解していただき、それをまちづくりとか観光振興に活かすということが記載されていた。そこがなかなか伝わっていないということで、それを踏襲した形で入れているつもりだが、どうしても単なるまちづくりとか、観光振興にしか見えないというご指摘かと思うので、生物多様性のめぐみがこういった地域の特色になっている、だからそれを守っていかなくてはいけないということが、分かるような形で検討していきたい。

藤本委員 成果指標でいうと、私もまったく同感なところがある。市役所の活動指標だと成果指標にならないと思うので、イベントの回数とか実施回数などは、市役所がいくらがんばってもなかなかあがらないし、成果にはならないのでなかなか難しいと思う。成果指標の取り方は、活動指標にならないような形を考えていただく必要があると思う。

10ページ、基本戦略5「活かす」がすごく難しいと感じていて、生物多様性を活かすというのは何だろうなという話があって、こうやってラインナップを見てみると、結局生物多様性というのが実現されたことが地域資源になって、それが魅力となって国内外、県外から人が来てくれるとか、熊本市で生産された農作物だけではなく工業製品を含めて、例えば地下水に配慮した工業製品だということを買ってもらおうとかそういうことのような気もする。基本戦略5「活かす」の状態目標5-1で熊本市の地域特性とあるし、行動目標の5-1、5-2でも地域特性とあって、5-3でいきなり歴史や文化と書いてあって、先ほど澤委員や大澤委員が言われたように、やはり生物多様性が成就されるようになることで、地域資源となるということだろうと思うので、そういう表現なり、そういう施策をやはり考えていかないと、単なる観光振興とかいうことになると思う。

そういう意味で、もう一つ、交流人口が増えるとか物が売れるとかだけではなく、新しい項目の立て方として、熊本市自体が生物多様性に配慮したまちづくりが行われているみたいなこともあっていいのかなと思った。例えば8ページ、基本戦略3「守る」の右上の施策のところで、街路樹の再生整備の推進とか一番下に市電緑のじゅうたんの維持管理とあるが、施策の中身が分からないので、どう整備されているのか分からないが、そういう生物多様性に配慮したまちづくりという整理の仕方もできるのではないかという気がしている。熊本市は都市部もあるし、田舎もあるのだが、まちづくりというと都市的なところの

意味があって、そこには生物多様性が薄いので、そういうところに熊本市がこういう取り組みをしているというのがあって一つ項目を立ててもいいのかなど。これは整理の仕方なので事務局でどう考えるかだが、そういうやり方もあると。なかなか「活かす」が難しいと思う。

そして成果指標だが、いろいろ意見が出たが、「活かす」は活用するなので、地下水を活用するということがある意味使ってもらうことでもあるので、地下水の水位などが維持される、もしくは増えた状態で且つ例えば企業の立地数が増えているとかそういう組み合わせのような気がした。ここは活用するという事なのでそういう考え方もあるのではないか。

梶原 環境政策課課長 たくさんご意見をいただいて本当にそのとおりだなと思う。私たちも考えていることはあるが、それを文字で、皆様に伝わるように記載ができていないところをすごく反省をしている。生物多様性とそのめぐみのつながりが施策に反映できてないということだと思うので、そのあたりは今日のご意見を踏まえて、また内部で検討していきたいと思う。

それから最後にいただいた「活かす」のところは、私たちは生物多様性のめぐみが地域資源になっていて、また地域資源があるから熊本市らしさが生まれていて、それを残していくことが生物多様性の保全につながるのだというストーリーはあるもののそれが見えないということだと思うので、もう少し深く検討していきたい。

佐山委員 今回、地下水に着目して生物多様性を理解しようという視点はいいと思うが、生物同士のつながりや個性といった生物多様性の外側にある地下水というものを含めると、さらに生物多様性が見えづらくなるという難点もあると思う。皆様のご指摘にもある通り、地下水と生物多様性の関係が分かりづらい提示の仕方がされている感じがしたので、常に地下水と生物多様性の関係性がどうなっているのか、分かりやすい表現の仕方に工夫が必要だと感じた。

具体的な点に関しては、9ページ、基本戦略4「創る」の状態目標の4-2で健全な生態系が回復している、行動目標の4-3で在来種・希少種を増やす、とうたっているが、成果指標が外来魚の割合を出しているというのは矛盾を感じる。数値を出すのであれば在来種・希少種がどれくらい増えたか、その割合を出さないと成果指標にはならないという気がした。そのあたりの各目標と指標の整合性みたいなものを、ちゃんととる必要がある。

細かいことだが、8ページ、基本戦略3「守る」の状態目標の3-1の「生きものが安心して生息生育できる自然環境が保全されている」というところで、「生きものが安心して」という表現は、あくまで人間側の視点であり、生きものは安心して生きている訳ではない。ここは例えば、「生きものが十分に生息生育できる」とか、表現を修正した方がいいと感じた。

あとは、再生可能エネルギーの利用に関して、最近太陽光パネルが大規模に設置されている。本来伐採しなくていいような雑木林を伐採して太陽光パネルを設置するのは、再生可能エネルギーの観点から進めているのだろうが、一方では自然環境が破壊されているという矛盾が生じている。それぞれの取り組みに矛盾が生じないような観点が必要だと思う。

梶原 環境政策課課長 まず8ページ、基本戦略3「守る」の状態目標3-1の「安心して」という言葉遣いについて、貴重なご指摘だと思うので修正したい。それから、基本戦略3「守る」の施策の下から3番目、再生可能エネルギーの推進について、アセス条例を検討している中でも再生可能エネルギーの推進と環境破壊のバランスをどうするのかということがいろいろ議論になっている。私ども脱炭素の推進というのが地球温暖化防止につな

がっついていき、それが気候変動の解決にもつながっていくと思っているが、委員のご指摘通り、環境破壊をしない前提での脱炭素化ということで再生可能エネルギーを推進していく必要があると考えている。

それから、9ページ、基本戦略4「創る」の行動目標4-3の在来種・希少種を増やすというところだが、在来種とか希少種というキーワードが必要だと思うものの、なかなかそれに直接携わるような施策がないので難しい。実際の施策は特定外来種の駆除であるので、成果指標も外来種の割合が減れば基本的に在来種や希少種の割合が増えるだろうということで設定したが、もう少し皆さんのご意見もいただきながら検討していきたいと思う。

奥村委員 先ほどから地下水に注目した施策について、生物多様性との関連があまり明確ではないという話が出ているが、地下水については湧き出るところではなく、集める集水域、先ほど言われたかん養林とか保安林など、熊本市内周辺も金峰山山系とか、いろいろな山系がある。こちらの集水域で浸透した水が川になったり湧き出たりしている。集水域の里地里山では、生物の多様性は、かなり高いと思うし、私が住んでいるところでも、そこから浸み込んだ地下水を井戸水として汲み上げて、水田を作って農業をやっている。そういう形で農業を営むことによって、この地域の農業生態系の中における生物多様性が保たれているという形もあるので、単に地下に浸み出る水だけではなくて、集水域を含めての生物多様性が維持されているという見方で見ていかれたらと思う。

梶原 環境政策課課長 先ほどから地下水と生物多様性がどうつながっているのかなかなか見えないので、そこは概要版とかでお示ししたいとお伝えしているが、生物多様性の生態系サービスの中に、雨が山に降ってそれが地下に浸み込んで、それがまた湧いて、海に行ってそこからという流れも、生物多様性が健全であればこの流れがきちんとできると思うので、金峰山や阿蘇からの話など、熊本市民が身近なものを使ってその仕組みとどうか、そういったものも示していきたいと考えている。

甲斐原委員 同じことを何度も言うようで申し訳ないが、最初のイラストの点、それから何度も申し上げている前回までの残したい自然、今出た熊本の街中など、いろんなキーワードがたくさん出てきているわけで、それを政策課課長がおっしゃるように、地域の人、これは自分の地域なのだ、江津湖、水前寺、いろんなところの地域の人、街中の人も含めて、ここに住んでいる私たちが生物多様性の豊かさをこんなに享受しているのだという、こんな危機的な状況があるから一緒に守らなければいけない、行政と一緒に守らなければいけないのだというふうになっていただくための戦略であろうと思う。同じことを言っているのだが、今回は行政区の特性も出ているが、行政区や残したい自然とか、いろんな地域での最後の活かす、まちづくり地域づくりに活かすというところで地域の方たちが一緒におっしゃっていただくために、ぜひ生物多様性の豊かさの現状と課題を分かるようなイラストにさせていただいて、ここにいる人たちがそれぞれの立場それぞれのことを、「あっ、これだったのだ。」というのをぜひまとめていただくと、次に皆さんと一緒に動けるのかなというのを感じているので、どうぞよろしくお願いします。

梶原 環境政策課課長 この戦略を今回見直す時のひとつ大きな目的というのが、依然として生物多様性というのが分かりにくい、それから興味を持たれる方がどうしても一部の人に限定されている、しかしながら生物多様性は私たちが生きていく上での基盤となるものなので皆でやっていかないといけないというのを、いかにして皆さんに知らせて、分かっていたら、各々の細かい取り組みに興味を持っていただくきっかけになるようなことを戦略で打ち出したいというのが今回の見直しの目的である。庁内でも話しているが、自分たちが知っている場所とか、知っている写真、知っている絵、それで説明をしていかな

いと一般的なもので説明をしても他人事となってしまう。ピンとこないし、引っ掛かりもない。全部自分と関係のないものと思われるしまうと痛感しているところなので、さきほどから言葉ばかりで何もお示しするものがない状態で言っているのが、信憑性が薄いですが、私たちもその点は重々認識しているつもりなので、限りなく分かりやすいもの、それから自分のものだとすることを認識できるようなものを、再度検討を続けていきたいと思っている。

永野委員 私は山のことはよくわからないが、水前寺で町おこしをしているが、自然のめぐみのこと、とにかくこれを取り入れた町おこしなのである。ただそのイベントだけやればいいというのではなく、小学生、中学生、高校生を皆巻き込んで、だから小学生には水検定、今は2校にあげているが、全員合格と。それから地域の清掃は小学生も中学生も皆、江津湖に入って清掃する。私たちもする。その地域にしっかり生きている、その環境を次の世代まで守ってもらうためには、子どもたちがとても大事である。であるからそこを巻き込むような施策というのは大事だと思っている。

梶原 環境政策課課長 委員のおっしゃる通りで、特に生物多様性の保全については重要ではあるものの、今日明日結果が出るものではない。市民の皆さんには、これまでどれだけ時間がかかって今があって、そしてやはり今後引き継がないと将来が危ないなということ、小さいお子さんから、小学生、中学生、高校生などの若い方たちに特に中心に伝えていきたいと思っている。ちょうど高校生とは来年もいろいろ具体的に共同で行う取組について進めている。小学生などは、今はタブレットでいろんな情報がくると聞いているので、いかに分かりやすいものを作って示していくことが重要と思っている。いろいろまた委員の皆様にもご協力していただきたい。

藤本委員 4ページ、骨子案の「創る」でOECMのことが書いてあるので、せつかく2030年の目標なので、9ページ、基本戦略4の「創る」のところで、象徴的な取り組みになるので、市役所としてOECMの推進をぜひ書き込んでいただきたい、という要望である。

もうひとつが、6ページ、基本戦略1「知る」の施策の一番下の、企業による生物多様性に関する情報開示の促進、前回も申し上げたが、今後企業は必ず生物多様性に配慮した行動が求められるし、それが取引の大事なポイントになる。今はそういうことはないがいずれそうなるということで、要は商工部門をぜひ巻き込んでほしい。ここでは環境政策課だけしか書いていないので、やはり地場企業に一番つながりがあるのは商工部門なので、ぜひ商工部門にも認識していただいて、むしろ普及的なものは環境も大事だが、直接やり取りする商工部門も大事だと思うので、巻き込んでいただきたい、これも要望である。

梶原 環境政策課課長 最後に言われたTNFDの商工部門ということだが、おっしゃる通りで、こちらはうちの経済部門と話をしていきたい。まだ浸透していない話だと思うので、環境局から積極的にアプローチしていきたいと思っている。

それからOECMの話は、確かに本当にその通りで、私も30by30を目標に入りたいと考えてはいた。そこは引き続き検討していきたい。

藤本委員 ぜひ。象徴的な取り組みになると思う。

高宮委員長 私の印象としては戦略の一つ一つについて、それぞれ状態目標と行動目標と

施策をまとめたことによって、いろいろ細かなこういう問題があるということが分かってきたと思う。それは非常にうまくできていると思うので、皆さんの言われたことをもう一度取り込んで作成して頂きたい。

地下水のことで、最後の成果指標のところは少し問題があったので、もう少しうまく取り込めるようにしてもらいたい。やはり最後のところの、例えば観光関係のことなども結局生態系のめぐみ、多様性のめぐみがあるからそういうことができるというのを、これから素案を作っていくときに、生物多様性がどう活かされているかをうまく納得できるように書いていただければうまくいくのではないかな。

大体ご意見は出回ったと思うが、この施策の全体については、このままでもう少しご指摘を受けながら、修正しながら進めていくということではいかか。これで進めていってもらって、次の素案で、細かな言葉とか、ここにこういうことを入れた方がいいのではないかなということがいろいろ出てくると思うが、それはまたそういう恰好でいったらいいのではないかなと思う。それでは施策については、これで異議なしという格好で進めさせていただいてよろしいか。どうもありがとうございます。

これで予定していた議事をすべて終了したので、進行を事務局にお返りする。

その他

澤委員 EPO九州の立場での話ですが、今年度生物多様性に関する様々な取り組みについての対話的な場の企画があり、たまたま今年度から推進会議のメンバーにさせていただいた経緯もあるので、こういった今回の議論をもっと幅広く、企業と連携してどう取り組んだらいいかというテーマで、そういった発信の場を一緒に作らせていただきたいと思いますと考えており、事務局の環境政策課に相談させていただいている。今回の生物多様性と地下水の議論だとかを、盛り込んだ講師の選定などさせていただきながら、こういった議論を少し平場でオープンにできる機会を提案できればと考えている。また然るべき準備が整ったらご案内とご協力のご連絡を差し上げたいと考えている。

閉会

緒続 環境政策課副課長 本日いただいたご意見を参考に素案に反映させていきたい。これをもって令和5年度第2回熊本市生物多様性推進会議を閉会する。